

令和4年度 学校自己評価表

鳥取県立倉吉農業高等学校

中長期目標 (学校ビジョン)	農業教育をはじめとして、あらゆる教育の場において豊かな感性を育て、基礎基本を大切に知の修得に努め、自らの可能性を信じて不断の努力を惜しまない生徒の育成を図るとともに、地域社会に貢献できる人材の育成を目指します。	今年度の 重点目標	1 基礎・基本の定着と学力の向上 2 基本的生活習慣の確立 3 地域連携と特色ある教育活動 4 進路意識の向上と進路保障 5 コミュニケーション能力の向上
-------------------	---	--------------	---

年度当初					評 価 結 果（最終）			
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	今年度の目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	目標達成のための改善方策	
1	基礎・基本の定着と学力の向上	基礎学力の定着	前年度基礎力診断テスト結果 ・1年間の学習の取組でD3は減少、特に2年生が大幅に減少している。 ※D3:筆記試験を課す企業で不合格が多い。 ・2年生上位層は大学一般入試で合格が目指せるB3以上2名。(4月から変化なし) ・B3生徒のうちB2以上の学力をつけ、中位層から上位層へ向上した生徒が数名いる。	・基礎力診断テスト結果におけるD3の割合が、1年生は、4月数値から10%減少、2年生は、4月数値から20%減少している。	・One week 問題集や朝学習の時間を活用して基礎学力の定着を図る。 ・朝学習・基礎学力テストの内容を検証し、実施方法等の改善に努める。 ・診断結果を用いた分析を国語、数学、英語各教科会で実施する。	C	・朝学習の意義を年度初めに再度確認し、年度を通じて継続した基礎学力向上意識を喚起する。また進路実現とも関連づけ、基礎学力の重要性に気づかせる。 ・家庭学習教材の取組の徹底を教科主導で行う。 ・基礎力診断テスト結果の自己分析を丁寧に行い、個人面談等を通じて目指すべき自分の姿を考えさせる。	
		授業改革の取組の推進	・各教科・科目で公開授業が実施され、協同学習の授業実践・授業研究は進んでいる。協同学習の手法による授業改革が徐々に実践されつつある。 ・ICTの全体の研修会を2回実施した。また、週1回、希望者を対象にした研修会を行い、Googleアプリを活用できる教員が増えた。 ・R4年度入学生の教科の新しい3つの観点別評価について、昨年度までに本校の評価基準等を協議し、方向性を出した。	・全ての教科・科目で協同学習の理論を取入れた分かりやすい授業を実践している。 ・生徒が積極的にICTを活用し、生徒の学習意欲と学力が向上する。 ・各教科ごとの評価表をもとに観点別評価を行い、生徒の学力向上につなげる。	・協同学習をテーマとした公開授業を全員が行うために研修会を実施する。 ・誰もがICTを活用した授業を実践するために、ICT研修を学期に1回実施し指導力の向上をはかる。1年生のChromebook授業活用が積極的に行われるようにICT活用推進委員会で計画し実践する。 ・教科間の連携を強化し、より良い評価方法を模索していく。		・協同学習研修会が開催できず、公開・研究授業も1部の教員しか実施できなかった。校外の協同学習の研修会には5名の教員が参加した。 ・ICT研修は学期に1回実施することができた。ただ、参加者は第1回21名、第2回35名であり、全教職員での取り組みとしては少し不十分であった。 ・1年生のChromebook授業活用のアンケートは準備中である。 ・観点別評価の方法について、各教科で問題点・改良点を検討しているところである。	・協同学習研修会は他の行事との日程調整を含め、年度当初に学習指導委員会で実施計画・方法を協議しておく。 ・ICT推進委員会で実施内容、時期、時間等を含め、多くの教員が参加できる日程を考えていく。 ・1年生へのアンケートを作成し、実施する。 ・学年末考査後に教育課程検討委員会を行い評価方法について検討する。
2	基本的生活習慣の確立	挨拶指導の徹底と服装規定を守る取組の推進		・全員が常に分離礼による挨拶ができる。 ・常に服装規定を守り、安定感のある生活態度で過ごしている。服装改善の保護者への文書を10%にする。	・授業、清掃、農場当番、部活動等あらゆる場面で分離礼を徹底する。 ・毎月の服装検査の実施と事後指導を徹底し、担任、学年団、学科、生徒指導部の連携を密にし、段階的・組織的指導を行う。	C	・あらゆる場面での、あいさつ、分離礼の徹底をする。 ・情報を共有し、学年団、学科、分掌の連携を深めた指導を行い、生徒の自律心の向上を図る。 ・服装検査基準の徹底と日常的な声掛けを、全職員で行う。	
		寮教育の充実	・日課に自習時間を設けているが、目に見えた成績の向上に実感が持てず、学習に対して自信を持ってない生徒がいる。 ・年間3回寮講演会をもち、コミュニケーション力の向上、農業及び関係業種への進路実現、救急救命法について学んでいる。 ・寮生サミットでは、他府県の農業経営者育成高校の寮生同士が、各校の紹介ならびに寮の現状と課題を話し合い交流を図っている。令和2年度は新型コロナウイルス感染拡大のため中止、令和3年度はリモート開催となり、十分な成果が上がっていない。	・基礎学力テストの成績が毎回65点以上になることをきっかけに、日頃の学習や進路実現に意欲的に取り組んでいる。 ・講演会後のアンケートで、内容の理解および満足度を3以上（5段階評価）と感じている生徒が60%いる。 ・他校を訪問し、対面での交流および寮見学を再開する。	・基礎学力テストの範囲に合わせた課題に繰り返し取り組みさせる。得点が伸び悩む生徒に対しては、課題プリントを追加し指導ならびに助言を加える。 ・講演の中に協同学習の要素を取り入れたり、体験することで理解が深まるよう、講師に依頼する。 ・新型コロナウイルス感染状況に応じた実施方法を、関係各校と協議する。		・2、3学期基礎学力テストの平均点は、1年生82.2点、2年生66.2点、3年生66.3点だった。 ・1月に寮OB山本忠昭氏による「50年を顧みて」と題された講演をいただいた。内容は人との出会いの大切さ、園芸試験場の研究内容についてだった。講演後のアンケートによると60%の生徒が講演内容に満足している。	・3年生に対する課題の内容が適切だったか検証する。全学年を通し魅力ある課題の作成を行う。 ・今後も、寮生活や学校生活を意欲的に送るきっかけとなる講演会を企画する。 ・令和5年度の寮生サミットは、兵庫県立播磨農業高等学校で開催される。今後は寮生サミットと研究協議会ブロック大会の合同開催となる。寮生だけでなく、各校舎監の協議や情報交換の場となる。他校の状況を現地視察で学ぶ。
		人生を考える	・人権学習を通じて知り得たことを自分のこととして考え、発言する生徒が少ないように見受けられる。 ・人権学習LHRでの話し合いを通じて自分の考えを互いに伝えあっているが、まだ改善の余地がある。	・自分は社会の一員であって、その社会をより良いものにしていくことで、自分の人生も充実させることができることを認識し、自覚する。 ・互いに自分の考えを伝えあい、認めあうことで、コミュニケーションの大切さを学び、より良い社会をつくるのに必要な基本的な態度を身につける。	・「人生を考える講演会」や「性に関する講演会」などを企画することで、人権問題を通して社会と自分との関わりについて一人ひとりが考え、感想を述べる機会を提供する。 ・人権LHRにおいては身近で自分事として考えられるテーマを設定し、Chromebookを活用するなどして、自分の意見を互いに伝えあうことができるよう授業の展開を工夫する。		・「人生を考える講演会」「性に関する講演会」を聴いて、自分の生命や人生について前向きに考えることができたという感想を述べた生徒が多かった。 ・人権教育LHRでは、授業で自分の考えを言うことができたという生徒がどの学年でも8割以上いるので、先生方の努力で自由に意見を伝えあえる環境づくりと授業展開の工夫がなされていると考えられる。	・人権教育の全体計画を見直すことで、より多様な人権問題に対応しながら、生徒に社会で生きる力を身に付けさせる。 ・自分や他者の生命や人生を尊重する姿勢・態度を育成するために、社会をより良いものに変えて行く方法と歴史について教えていく。 ・人権教育LHRではクラスの意見を全体で共有するために、更にChromebookを活用することが求められるので、その活用能力を育成する。
	教育相談・特別支援教育担当を中心とした組織的取組の推進	・自己理解・他者理解の意識が進んでいない生徒は、友人との関係の持ち方に困惑しやすい傾向がある。 ・QUの結果において、非承認群・不満足群・要支援群に分類される領域に学校生活に対する意欲の低い生徒が見られる。	・自己理解・他者理解が進み、より良い人間関係作りができるようになり、生徒アンケートの「私のクラスは自分にとって過ごしやすい場所である。」の割合が7月に比べ12月が上昇している。 ・QUの結果において、生徒の学校生活意欲平均得点が第1回目検査より第2回目検査が向上している。	・新入生全員面談と2・3年生の面談、職員による生徒観察をとおして、生徒の実態把握をし、より実態に即した学習支援・生活支援をする。 ・校内職員研修会を実施し、QU等を活用した教師の生徒対応のスキルをアップさせる。	・1年生の全員面接を実施し、また教育相談担当や教育相談員との生徒面談は定期的に外部機関の助言も受けながら生徒の現状把握と適切なアドバイスができた。生徒アンケートの「私のクラスは自分にとって過ごしやすい場所である。」の項目は7月(83.1%),12月(85.5%)となり、2.4%向上した。 ・職員研修を予定通り実施し、支援を必要とする生徒の共通理解が進んだ。QUの結果は、第1回目検査より第2回目検査で、学校生活意欲は全体的に向上し、特に教員や友人との関係が改善している。全国平均と比べ進路意識が低い傾向があるが、教員や友人との関係は良い。また、クラス内の互いの配慮は高いが、かわかりが低い結果となっている。	B	・1年生の全員面接を実施する。 ・校外専門機関と引き続き連携していく。 ・職員研修を充実する。 ・QUの結果を受け、教職員の生徒対応のスキルアップを図る。	

年度当初					評 価 結 果（最終）		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	今年度の目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	目標達成のための改善方策
3	地域連携 と特色あ る教育活 動	各科の魅力づくり	・生物科はコロナ禍においても感染対策を取りながら可能な限り乗馬交流を実施した。また、地域への普及を目指す青パバイヤプロジェクトは本校産苗の供給により県内生産者数の増加が見られた。 ・食品科はお米甲子園における7年連続の入賞やスマート農業の実践、のうこう市場や北谷販売など地域に認知されている取組を続けている。 ・環境科はJR倉吉駅の環境整備や草花交流など地域貢献につながる取組を継続している。	・地域に定着した取組を継続しながらも時代のニーズにマッチングした特色ある取組やSDGsの理念に基づいた学習活動を実践している。 ・調査・分析を中心として、より科学性を高め、地域農業への貢献を視野に入れたプロジェクトに取り組んでいる。	・各科の特性に基づいた課題研究を推進し特色ある取組を地域振興につなげる。 ・地域貢献に加えて環境問題などグローバルな視点を持った課題研究を実践する。 ・SDGsに関する生徒及び教職員の知識と理解を推進するために研修会をもつ。	A	・各学科ともに生徒につけさせたい力や育てたい姿を明確にし、中学生や保護者、地域のニーズを把握しながら本校生徒や中学生が魅力に感じる取組を進める。そのためには各学科の取組について精査し、スクラップアンドビルドの視点を持ちながら進めることが大切である。 ・外部関係機関（産業技術センター、保健所、大学、短期大学、農業大学校、農業試験場、県中部建設協会、県土木整備部など）との連携を引き続きおこなう。
		地域との連携・発信	・食品科はのうこう市場の販売実習だけでなく、米の食味鑑定会での入賞、スマート農業の実践が特色ある取組として認知度も高い。環境科はJR倉吉駅周辺の草花装飾だけでなく、小学校等との草花交流が特色ある取組として継続している。 ・これらの取組は新聞やテレビなど多くのマスメディアに取り上げられ、本校の魅力を十分に発信できた。 ・中学生一日体験入学は、一年ぶりに開催した。日程を1日にしたこともあり参加中学生は74名であった。	・積極的に地域と連携し、その取組が地域のニーズに応えるものであるとともに、生徒の学びが深まり自己肯定感や進路意識の醸成につながっている。 ・教育活動を積極的に本校公式SNSで発信するとともに、一般に対しては報道機関に資料提供することで地域に本校の理解が進んでいる。 ・中学生一日体験入学の開催を2日間に戻し、県内外からの参加者が150名を超え、3つの学科の主な学習内容を体験することにより、中学生、保護者、中学校教員の本校理解が進んでいる。	・科学的裏付けのあるプロジェクトを進めていくために、関係機関（大学、農業大学校、農業試験場、産業技術センターなど）との連携を一層進める。 ・ホームページの投稿の仕方、報道機関への資料提供の方法について周知する。 ・中学生一日体験入学の参加者を増やすために、日程が他校と重ならないようにするとともに、各学科の魅力ある取組をSNS等を利用して県内外に発信し、中学生および保護者の興味・関心を引きつける。	B	・SDGsを意識した取組をプロジェクト研究に取り入れ、マスコミへの情報提供や地域への発信を進め、生徒の自己肯定感や達成感を高める。 ・地域に定着している事業は継続しながら、その方法についてはICT技術などを取り入れて効率化、省力化を図る。
		資格取得の推進	・FFJ級位検定の合格者は、初級位62名（合格率53％）、中級位23名（同26％）で昨年実績を上回った。 ・各種資格検定の合格者数延人数は278名で、昨年の263名を上回った。 ・最難関であるアグリマイスタープラチナの認定者が2名あった。	・FFJ検定合格率が初級60％以上、中級40％以上、上級位検定合格者数は25名以上、合格率85％以上である。 ・各種資格検定の合格者数が延300名以上である。 ・アグリマイスタープラチナ認定者、農業技術検定2級、測量士補などの難易度の高い資格取得者が昨年以上である。	・FFJ検定の意義や学習方法等の説明をとおして生徒のモチベーションを高める努力を続け、普通科教員も含め教員が一丸となり指導する。 ・資格・検定の情報を積極的に案内することで受検者を増やし、資格取得の有利性を説明し主体的に学習させる。 ・農業技術検定問題集やテキストを活用して出題傾向を分析・把握し指導する。	C	・アグリマイスター認証を資格取得のモチベーションとさせ、FFJ検定をはじめとする各種資格について、普通科教員の力も借りながら目的・意義や学習方法などについて農業科職員が一丸となって指導する。 ・寮生に関しては自習時間を利用して級位検定の事前学習に充てる。 ・農業技術検定について教員が出題傾向を分析、把握した上で、各農業科目内においても学習指導をする。
		学校からの情報発信の推進とPTA活動の活性化	・青パバイヤやお米甲子園などの成果がマスコミに多数取り上げられ、生徒の達成感や自己肯定感につながっている。 ・各分掌へはホームページ(HP)への掲載を呼びかけているが、掲載方法が十分に伝わっているとは言い難い。 ・PTA活動への参加者は、各行事、研修会等への参加者数の推移から考えると一定数ある。	・特色ある取組をマスコミへ情報提供、地域へ発信することによって、生徒の自己肯定感や達成感がより一層高まっている。 ・教育支援部を中心に、各分掌や各部がHPを積極的に更新し、行事の様子など本校の活動が広く認知されている。 ・保護者等が積極的にPTA行事に参加している。	・特色ある取組をHPやSNSに投稿する。また、マスコミへ情報提供し地域へ積極的に発信する。 ・年間60回以上のHP掲載を目標に取組み、実習や部活動の様子を担当者や部顧問がHPにアップするよう働きかける。 ・保護者への情報伝達手段として「まちcomiメール」を活用する。	B	・今後も、報道機関へ本校の特色のある行事を積極的に情報提供し取材の依頼を行う。 ・学校行事や実習の様子、部活動の報告など情報発信をHPへ基本的に、毎週アップする。また、保護者宛文書、各行事の案内、出欠返事などメール配信を利用し確実に伝えるようにする。 ・PTA活動は感染対策をとりながら通常活動していく。
		教育活動に必要な人的・物的・地域資源の有効活用	・独自事業・その他事業に関する講師の報償費、特別旅費等を適正に執行し、教育活動を支援している。	・学校予算の適正かつ迅速な執行を行い、2学期末までに執行率60％以上とする。	・各種事業等の計画段階から教職員と連携し、地域、保護者、関係機関等を教職員へつなげる役割を果たす。 ・地域の人材等の情報提供を行う。	B	各種事業の実施要項を必ず事務室にも稟議し、情報を共有することが重要である。校内情報共有の在り方を検討する。

年度当初					評 価 結 果（最終）		
評価項目	評価の具体項目	現状	目標(年度末の目指す姿)	今年度の目標達成のための方策	経過・達成状況	評価	目標達成のための改善方策
4	進路意識 の向上と 進路保障	インターンシップの推進	・2年生インターンシップはコロナ禍のため2年連続で中止した。 ・スーパー農林水産業士育成カリキュラムとしての長期インターンシップは、万全の新型コロナ感染防止対策を取った上で、2・3年生延10名が畜産農家、園芸農家、森林組合等で実施した。	・9月に2年生インターンシップを実施し、就労意欲の向上や進路選択の大きな一助につながっている。 ・長期インターンシップに参加する生徒が10名を超え、より実践的な農業体験を経験することにより、農業後継者としての意識や態度が身に付いている。	・早期にインターンシップ委員会を開催し、地域の関連団体との連携も取りながら、生徒の進路希望に沿った体験先を開拓する。 ・長期インターンシップは鳥取県農林水産部と連携し計画していく。	B	・新年度の早期にインターンシップ委員会を開催し、地域の関連団体との連携を取りながら、学科の学習内容に関連し生徒の進路希望に沿った体験先を開拓する。 ・長期インターンシップは鳥取県農林水産部、県外先進地研修は鳥取県農業教育会と連携し計画していく。
		農業後継者の育成	・スーパー農林水産業士の5期生5名が認定され、2年生5名が来年度の認定を目指している。 ・スーパー農林水産業士認定者のうち、5年連続で鳥取大学、2年連続で公立鳥取環境大学へ進学した。 ・農業関連の進学・就職割合（42.2％、35名/83名）が微増した。（R2：38.6％、32名/83名）	・スーパー農業水産業士6期生が5名以上誕生し、鳥取県の農林業を支える人材が育っている。 ・スーパー農林水産業士のしくみ、利点や、各学科の取組を今まで以上に県内外の中学校へ情報発信することで入学希望者数の充足率が上がる。	・スーパー農林水産業士育成プログラムに則ったカリキュラムを確実に実施し、就農意欲喚起に関わる行事に積極的に参加させる。 ・4年生大学への進学希望者の基礎学力を高める取組を継続し、特にプロジェクト研究に重点をおいて主体的に取り組ませる。	B	・スーパー農林水産業士育成事業について中学校への情報発信をより一層進め、産業振興課など市町村レベルとの交流を密にして、農業後継者となる人材（小中学生）についての情報を収集する。 ・1年生に対してはスーパー農林水産業士の意義や利点などを伝え、希望者を増やす努力をする。 ・農業の楽しさ、やりがいを感じさせる授業、実習を一層実践するとともに、卒業生をはじめ農業経営者などと触れることのできる機会を作り農業の魅力を伝える。
		進学希望者への支援	・3年生で農業系大学進学を希望する生徒2名を含む進学希望者が約20名おり(2年時10月調査)、大学進学研修プログラムの参加案内や個別指導を開始している。 ・2年生で農業系大学進学を希望する生徒2名を含む進学希望者が約30名おり(2年時10月調査)、今後個別指導を行っていく。 ・1年生の4月調査は実施済。	・3年生進学希望者の進路希望が実現されている。 ・1・2年生の進学希望者に対する継続的な学習支援体制が実現されている。	・進学希望者に対する個別指導を継続させる。 ・年度初め(4月)に実施した希望調査を基に生徒の進路希望を把握し、早期に個別の指導体制を構築する。 ・進路指導部、学年団、各専門教科担当が連携を密にし学校全体で生徒の指導にあたる。	B	・保護者、関係機関とも連携を密にし生徒にとって好ましい進路実現を行うため前年度から担任を中心に個別面談等を継続し生徒一人一人に対しきめ細やかな進路指導を行う。 ・特別な支援の必要な生徒に対し臨機応変に様々な角度から進路指導を行う。生徒理解を重要視し、可能な限り生徒の主体性を引き出す進路指導を行う。 ・進路LHR、3者懇談、基礎学力診断テスト、外部支援機関からの意識付けなどを有効に活用し日々継続的な進路意識の高揚に努める。
5	コミュニ ケーショ ン能力の 向上	異世代との交流推進	・学校開放講座、田んぼの学校等はコロナ禍で中止としたが、保育園、中学生との花育交流や西中学校農業体験学習、あぐりキッズスクール等は、生徒が習得した知識・技術をもとに主体的に指導できた。 ・昨年に引き続き生産物販売実習（のうこう市場、北谷販売、駅パル、学園祭生産物販売）は感染症対策を施して開催した。それぞれ多くの来客で賑わい、学校理解と地域貢献につながった。	・本校で身につけた高度な技術・知識を異世代と交流し、指導することによって自己肯定感や自信につながっている。 ・交流事業の企画、運営などを生徒が主体となって取り組むことができ、コミュニケーション能力がさらに高まっている。	・学校開放講座は、よりニーズに合った内容で実施するとともに、指導する側に立つ生徒の意識や技術を高め、主体となる学びの場面を確保する。 ・目的の明確な提示、数値データ等の記録、分析する習慣をつけるなど、PDCAサイクルを意識した取組とする。	B	・交流学习の目的や方法について再検証し、生徒のコミュニケーション力向上に、より効果がある事業を精査し、回数より質の向上を目指す。 ・異世代交流がもたらす効果を生徒が実感できるような自己評価や他者評価などの事後振り返りを重視し、積み上げによる生徒の力の向上と定着を図る。 ・BYAD（学校推奨情報端末持ち込み）2年目とウィズコロナの視点から、リモート形式も含めた新しい交流方法を模索する。
		学校施設の開放	・地域に学校施設を開放し、本校で取り組んでいる農業教育を地域住民に体験してもらうことは、本校理解を進めるだけでなく、生徒にとって日頃の学びの意義を確認し、自己肯定につながる重要な意義を持っているが、昨年はコロナ禍のため本事業は中止した。 ・各科とも定員割れが続いている状況であり、中学校の先生方に本校の学習内容を知っていただく必要がある。	・3学科を代表する実習（乗馬教室、食品加工、木材加工、フラワーアレンジメント）に参加する地域住民の数が延50人を超えている。 ・地域に本校の学びの理解が進み、指導にあたる生徒にとって学習意義の確認や自己肯定につながり、コミュニケーション能力が向上している。 ・中学校の先生方の本校の学習内容の理解が進み、進路指導に活かされ志願者数が前年より増えている。	・地域への学校施設開放に関する情報発信を学校HPなどの媒体を使って積極的におこなう。 ・主体的に指導する生徒のスキルアップをはかるため、早期から繰り返し指導方法を練習させる。 ・中学校の先生方が出席しやすい日を設定し、参加者数を増やす。目標30名。	B	・学校施設の開放事業を若年層（小中学生）と保護者世代にターゲットを絞り、本校進学希望者増加につなげる。 ・特にあぐりキッズスクールの体験カリキュラムのあり方（内容、時期、ボランティア生徒の育成）について検討する。 ・年間を通して多くの外部からの来校に対して安全性を考慮し、整理整頓に努めるとともに老朽化施設の改修や最新施設への更新を要望する。
		生徒会活動と部活動の活性化	・生徒会活動は、執行部、農業クラブを中心に自主性が育ち始めているが、生徒会活動に無関心な生徒も見受けられる。 ・年間を通して活動している部活動が限られている。	・生徒会執行部の積極的な活動を通して、全校生徒が生徒会活動の意義を認識し、生徒会活動に積極的に参加できる。 ・中国大会と同程度の大会に出場する部が、文化系、体育系、農業クラブを合わせて4部以上となる。	・生徒会執行部、農業クラブが自主性を発揮し、生徒が主体となった生徒会行事を実施する。 ・生徒総会、農業クラブ総会、表彰式、壮行会等を充実させることにより、部活動に対する意識の高揚を図る。	C	・生徒会行事にはほとんどの生徒が積極的に参加し、自ら楽しもうという雰囲気があるが、企画・運営の面で生徒の主体性、創造性を活かしきれなかった。 ・中国大会以上の大会に5部が出場した。（文科系1、体育系3、農業クラブ）年間を通して活動する部活動は増えつつあるが、活発とは言えない。

A〔十分達成〕100～90 B〔概ね達成〕89～70 C〔変化の兆し〕69～50 D〔まだ不十分〕49～30 E